

〔論文〕

## 結婚という契約 — *Sense and Sensibility*における主義・宗教・経済 —

伏見 親子

### 序論

ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775–1817) の2番目の完成作品で最初に出版された『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811)<sup>1)</sup> は、冒頭からいきなり生と死と結婚に関する金銭問題で幕を開ける。これは、愛情が深く関わる人生の最も重要な時期に当たっても金銭問題を避けては通れない現実を、読者につきつける作品である。

〈愛情の保証＝生活の保障〉というなんとも現実的で夢のないこの作品は、出版から200年近く経った現代でも、邦題『いつか晴れた日に』としてエマ・トンプソン、ケイト・ウィンスレッド、ヒュー・グラントというそうそうたる俳優を揃えて映画化(1995)され、ヒットした。19世紀初頭の英国の田園とロンドンを舞台に繰り広げられる、性格が全く異なる美しい姉妹の結婚物語、と聞けば頷けよう。

この姉妹エリナとメアリアン (Elinor & Marianne Dashwood) が表す性格はその表題が示すとおり分別 (sense) と多感

(sensibility) であり、それは当時の英国文化が古典主義時代からロマン主義時代への転換期にあっていたことを暗示している。のみならず、エリナの恋人エドワード (Edward Ferrars) が目指す牧師職に関わる階級と経済の問題、その宗教上の立場から生じる問題もかれらの恋愛の進行に絡み、*Sense and Sensibility*は当時の主義・宗教・経済問題を「美しい姉妹の結婚物語」という砂糖衣でくるんだビター・スイートな物語に仕上がっている。実はこれらの問題は、時代と表面上の形は変わっても社会には常に存在するものであり、それゆえに、ただ甘いばかりのラブ・ロマンスよりも好まれ続けるのかもしれない。

本論では、物語の進行にしたがって、*Sense and Sensibility*の中で当時の主義、宗教、(家庭) 経済問題が姉妹の結婚物語を通してどのように扱われているかを考察し、併せて、これらの問題を内包し統合する西洋社会の結婚とは何か、にも目を向けたい。

### I. 古典(保守)主義とロマン(急進)主義

姉妹はノーランド荘園 (Norland Park)

の地主であった父親の死後、その領地を異母兄弟夫婦 (Mr. & Mrs. John Dashwood) が相続したのを機に母方の親戚サー・ジョン・ミドルトン (Sir John Middleton) の所有するバートン荘園近くのバートン荘 (Barton Cottage) に母と妹マーガレット (Mrs. & Margaret Dashwood) と共に移り住む。

長姉エリナは整った容姿を持った19歳、「高い理解力と冷静な判断力」があり、同時に「優れた心情 (an excellent heart) を持っている—性格は愛情深く、感情は鋭敏であるが、それらを統べる術を知っている」娘として登場する。この「鋭敏な感情を統べる術」を作者は「ある種の知恵」(a knowledge) と呼び、これを備えたエリナのみを作者は「優れた心情」の持ち主とする。一方、16歳半のメアリアンの容姿は姉に勝るとも劣らず、「能力は多くの点でエリナと全く同等」であり、「分別もあり賢いが、すべてのことに度が過ぎて、悲しみも喜びも際限がない」娘として対比される。その「感情過多」の性格が行動に現れた場合、「完全に思慮を欠く」ということになる (pp. 6-7)。作者が二人の容姿、知力、能力、愛情深さをほぼ同等に設定した上で、二人の違いをこの「知恵」の有無のみとしていることに注意するべきである。

メアリアンの行動原理は、「人間は正しくないことをしている時にはいつも自覚するもので、それで楽しく感じなくなる。」(p.68)

だから、自分が楽しく感じるときは、間違ったことをしてはいないのだ、というものである。この個人の感情を判断の基準に据える考え方は、当時流行し始めていたロマン主義に染まったものである。個人の自由を社会の規律よりも上位に据え、自分の意のままに行

動することを正直であるとし、善とする。

バートン荘園に客として滞在していたブランドン大佐 (Colonel Brandon) はメアリアンに惹かれたようだが、当のメアリアンは彼が35歳ということで結婚適齢期を過ぎた男としてしか見ない。悪天候の際をついて散歩に出かけたメアリアンが坂道で転んで足をくじいたところを、狩りで通りかかったウィロビー (John Willoughby) が助け、有無を言わず抱えて家に運び込む。家柄も悪くなく容姿端麗で音楽や詩の趣味も自分の好みと一致する彼にメアリアンは夢中になる。彼女は、あらゆる点で自分と趣味が一致し、しかも情熱的にそれを表す人でなければ愛せない、と表明していたのである (p.17)。彼女は自分の感ずるまま周りに顧慮することなく、おおっぴらに彼と付き合う。

当時、紳士淑女たるもの、正式に両家の承認を得て婚約が成立するまで、二人だけの時間を持ち続けたり、身に付けるものや送り主がそれとわかるものをプレゼントしたり、私信を取り交わしたりするものではなかった。また、婚約 (公けに結婚を約束) すれば、それは即ち結婚したも同然と見做された。一見不自由な束縛ではあるが、物事には必ず正負の両面がある。この不文律は、当時結婚に際しての立場が弱かった女性を保護するという利点もあった。初婚で処女性を疑われた女性には、まともな結婚の見込みがきわめて薄かったからである。しかし、ウィロビーとメアリアンはそれを公然と破って、メアリアンは彼に自分の髪の毛を与えたり、二人だけで行く先も告げずに馬車で遠出をしたりする。少なくとも、メアリアンにすれば結婚するつもりであり、何ら後ろめたく感じなかったから、

間違っていない、というわけである。メアリアンは自分の感性にのみ従い、自分がいとも簡単に無視したこの不文律の利点が目に入らなかったのである。

社会の不文律を無視し、「感じること」のみを優先することの不都合な結果を、この小説は以後縷々と描いて見せる。婚約をしていない状態でそれをするという事は、逆に言えば、二人が結婚を前提として付き合っていることを暗黙のうちに周りに示していることになる。周りはそうした間柄として二人を扱うが、一方的にどちらかが離れていっても結ばれていない婚約は何の拘束力も持たない。婚約を破るのではなく、婚約をしていないのだから、何の咎もない。残された方は、そういう振る舞いをしていなければ自分ひとりの心の痛みだけで済んだものを、ましてや相手が別の人と正式に婚約しようものなら、「捨てられたもの」として周りに哀れみ或いは軽蔑の目で見られるという二重の苦しみを負う上に、相手の名誉は表向き、社会的には無傷であることを認める羽目になる。

果たして、理想の騎士のように見えたウィロビーはある日突然ロンドンへ去ってしまい、彼を追いかけるためにサー・ジョンの義母ジェニングス夫人 (Mrs. Jennings) に同行してロンドンに行ったメアリアンは、彼の女相続人との婚約を知らされる。そこで彼女は、自分は「彼と婚約していない。」従って「彼は私との約束を破ってはいない。」(p.186)と、その点の関しては相手を弁護せざるを得ない。それを受けたエリナも憤慨するジェニングス夫人に対して、「これだけは、ウィロビーさんに対して公平 (justice) にする必要がある。」と前置きし、「彼は妹とのはっきりと

した婚約を破ったわけではない。」(p.196)と、言わざるを得ない。これを聞いたジェニングス夫人の「おやまあ！彼を弁護するふりなんかしなさんな。」(同) という言葉は、まさにそうせざるを得ないエリナとメアリアンの立場を突いている。

二人が婚約を取り交わしていなかったことを告げられた側の反応は、一様である。エリナはメアリアンに、「それなのに、彼に手紙を書いたの？」(p.186)と訊ね、ジェニングス夫人は先の言葉に続けて、「(ウィロビーは相続することになっていた) アレナム・ハウス中彼女を連れまわして、これから住むことになる部屋まで決めてきたくせに！」(p.196)と叫ぶ。二人の行動は、婚約の証拠と見なされていた行為、婚約していなければ社会規範から逸脱していると見なされる行為だ、ということである。

これに対するメアリアンの返答は、「もっとも厳格な法律上の契約が私たちを結びつけたのと同じくらい厳粛に、彼と婚約していると感じていた。」である。「でも、彼はそう感じてはいなかったのね。」と、エリナは「感じる」ことを重視する危うさを指摘する (p.188)。

この事件、一方はしかるべき家の令嬢と華々しく結婚して社交上の身分の保証を得たのに対し、もう一方は社会的には婚約を破棄された被害者ではなく、単に火遊びの挙句捨てられた軽率な女に過ぎないという、いわば一人勝ちの構図を持っている。一方は正式な「婚約」という社会的手続きを利用して社交界に復帰し、もう一方はそれができなかったからである。現にサー・ジョンの令夫人は、ウィロビーの婚礼が済み次第自分の名刺を置い

てしようと、つまりウィロビー夫妻と交際を始めようと考えている。(p.216)

エリナはこの件でサー・ジョンなど親戚知人ができるだけメアリアンの前で騒がないようにジェニングス夫人を通して口止めし、ブランドン大佐から聞いたウィロビーの過去の不行跡—大佐の昔の恋人の忘れ形見で後見している少女を誘惑して妊娠させ、捨て去ったこと—をメアリアンに告げてウィロビーへの未練を断たせ、人前で取り繕うことも思い浮かばず身も世もなく嘆く彼女の態度を改めさせようとし、できる限り事件の沈静化を図る。メアリアンの一人負けの構図から、二人の間で何ら取沙汰するに価するそういう関係がなかったことにするノー・ゲームの構図へとの転換を図る舵切りである。それがメアリアンの名誉と傷つけられた感情を守る最良の手と心得ていたからである。

「感情」を「感じたまま」表に出して騒がない、それが何よりも傷ついた「感情」を守る手だというエリナの「知恵」、それを欠いたために自分の「感情」に囚われて足元をすくわれたメアリアンの屈辱が鮮やかに描き出される。

メアリアンが体現していたものは、当時の退廃した上流社会の文化をフランス革命やイギリスの社会不安の原因と見做し、既存のあらゆる体制や文学を批判したウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836『政治的正義に関する研究』(*Enquiry Concerning Political Justice*, 1793)、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-1797) らの系統を引く、エリザベス・インチボールド (Elizabeth Inchbald)、ロバート・ベイジ (Robert Bage) が代表する

1790年代の「流行の小説」が称揚した「誇張された道徳、薄っぺらな知性、粗雑な芸術性」である。それは「進歩的」であろうと、つまるところは抑制が効かなくなって自滅へと至る、自分の感情のみが判断基準の、極めて視野の狭い危うい生き方であった<sup>2)</sup>。特にメアリ・ウルストンクラフトの著書は1790年代後半に広く読まれていたし、彼女は不倫の挙句妊娠、自殺未遂を起こしていた。オースティンの父親が自宅で営んでいた私塾の生徒の父親が彼女を後援していた関係で、オースティン一家で彼女のことが話題に上った可能性もあると思われる<sup>3)</sup>。メアリアンの造形に彼女が投影されていたとしても不思議ではない。

対して、エリナが体現していたのは、近代保守主義者エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1797) が『フランス革命に関する考察』(*Reflections on the Revolution in France*, 1790) で主張した社会制度の遵守である。作家としては、エリザベス・ハミルトン (Elizabeth Hamilton)、フランセス (ファニー)・バーニー (Frances Burney) がこれに近い立場をとり<sup>4)</sup>、オースティンも同様である。エリナは周りの状況を見据え、物事の最良の解決法を探ろうとする。自分が属する社会の中で不都合なことが起こった場合、社会を悪として打ち壊そうとするのではなく、その社会の正負の面を見極めてより良い生き方を探る、そういう生き方をオースティンは是としたのである。

## II. 宗教と道徳

賢明なエリナとて、幸せな恋愛をしていたわけではない。兄ジョンの妻ファニー (Fanny) の弟エドワードに惹かれ、彼も自分を愛しているようなのに、彼の態度は曖昧である。しかもファニーをはじめ母フェラーズ夫人 (Mrs. Ferrars) も持参金の少ないエリナとエドワードが付き合うことは快く思っていない。ジェニングス夫人の遠縁で貧しいルーシー・スティール (Lucy Steele) はエリナとエドワードが惹かれあっているらしいとわかると、自分はエドワードと密かに婚約しているとエリナに打ち明けて証拠の品を見せ、口止めをする。エリナはエドワードの振る舞いに合点がいくが、若気の至りで狡猾で無教養なルーシーと婚約してしまった彼が今は自分を愛していることを確信しているだけに、ルーシーとの婚約に縛り付けられた彼を気の毒に思う。

ここで、なぜエドワードはもはや愛してはいないルーシーとの婚約を解消しなかったのか、という疑問が湧く。彼はウィロビーとは全く逆のことをした。つまり密かに婚約をし、それを世間に知らせるような行動をしなかった。もちろん、最初は無一文のルーシーとの結婚を反対されるだろうという懸念があったからだろうが、逆に愛が冷めた今となっては、この婚約は解消しても誰にも知れない。密かな婚約自体、してはならない行為であったのだから、それを解消するのは間違っているとは言えない。公けにしていなかったのだからルーシーの評判が傷つくわけでもない。そ

れにも拘らず、彼はルーシーが婚約解消を望まない限り、エリナを愛していながらも、もはや愛していないルーシーとの婚約を継続した。ウィロビーが厚顔無恥の典型とすれば、エドワードは誠実の権化である。

実はエドワードがなろうとしていた牧師という職業が、彼に婚約を解消させなかったもっとも大きな要因ではなかったか。

オースティンは、英国国教会 (the Established Church) の聖職禄を保持する牧師 (rector)<sup>5)</sup> を多く輩出してきた家柄に生まれた。アイリーン・コリンズ (Irene Collins) が、『ジェイン・オースティンと牧師』の中で、両親の牧師関係者のみを取り出した家系図を載せているが<sup>6)</sup>、毛筋の良い英国国教会牧師一族というのに何の不足もない。オースティンは、A.C.ブラッドリー (A.C. Bradley)、リチャード・ウェイトリー (Richard Whately) などが言うように、あからさまには小説に書かなかったにせよ、物語の場面で折に触れ宗教的倫理観が現れる「キリスト教徒作家 (Christian writer)」<sup>7)</sup> という一面を持っているのである。

オースティンに深い影響を与えたエドモンド・パークは前出のフランス革命に関する著書の中で「宗教と社会は共に立ち、共に倒れるもの」と論じ、司祭リチャード・ワトソン (Bishop Richard Watson) は1795年に「宗教が人間の良心を捉えることができなくなるようなことになれば、政府は国民への権威を失い、続いて野蛮な無政府主義が起こるだろう。」<sup>8)</sup> と書いている。周知のごとく、宗教と国家が一体になったものが英国国教会である。

華々しい軍隊にも法曹界にも入らずに、終

始変わらず英国国教会の牧師を志すエドワード (pp.102-103) が、自分が交わした約束を自ら破るような、良心に背き宗教的倫理に反するようなことをしないのは当然である。その人格を信ずるがゆえにエリナは彼を愛し、またそういう彼だからこそルーシーとの婚約を維持し続け、結婚してしまうのだろう、と自分の愛が報われないことをも確信せざるを得ないのである。

やがて秘密の婚約がルーシーの姉の口からフェラーズ夫人にばれ、エドワードは婚約解消を拒否したことで相続の対象から外される。彼の収入が勘当によって一人では生計が立たないほどわずかになっても、ルーシーは彼から離れない。彼よりいい相手が現れるまでは、無一文の彼女は彼と一緒にいても損をしないからである。ブランドン大佐はエドワードの心根に感心し、またその結果彼が陥った境遇に同情して、自分の領地デラフォード (Delaford) の聖職禄付き牧師に彼を推薦しようと申し出、そのことをエドワードに伝えてくれるようエリナに頼む。その聖職禄によってエドワードは生計が立つようになり、ルーシーとの結婚が可能になってしまい、自分はエドワードと永久に引き離されることになるだろうと予想しながらも、エリナは引き受ける。

エリナが真髓を発揮するのは、宗教的倫理に忠実なエドワードを自分の苦しみをこらえて支えるときである。彼女はエドワードと心の奥底、宗教的倫理観でつながっていることを知っている。ここで小説の表に輝き出たのは、主義ではなく、宗教観である。

ただこの状況は、第三者の目には滑稽に映る。ブランドン大佐の申し出は、ルーシーと

エドワードが愛し合っていると思っていて、なおかつ、エリナとエドワードの心中を知らない、という前提でなされたものであるが、実はエリナとエドワードにとってはこの上なくありがた迷惑な申し出、となっている。エリナの方は、これでエドワードを完全に失ってしまうことになる、と覚悟するし、エドワードの方は、大佐が「(推薦権を売れば) 1,400ポンドは得られたのに」(p.295) とエリナの兄があきれるほどの聖職禄をエリナを通して提供するということは、彼女が大佐と結婚することになっていて大佐に口利きをしてくれたからだ、と思いついでしまう。お互い、相手から永久に切り離されることを痛切に感じながら、エリナはお祝いを言い、エドワードはお礼を言う羽目になる (pp.288-291)。

作家オースティンはその皮肉な状況を余すところなく描くが、しかし二人がそうせざるをえないという点においては、躊躇はない。

大まかに言えば、この時代、西洋社会は宗教の時代から道徳の時代へと移り変わっていた。中世は宗教が戦争の名目になったが、イギリスが国教会制度を確立して宗教を国家の支配の下に置き、スペインの無敵艦隊を破って海の覇権獲得に乗り出し、植民地を求める経済戦争が始まってから200年以上、政治と経済の体制の下で時の為政者に左右される宗教は絶対性がない。地球が丸いことは誰もが認め、ニュートンなどの科学者が輩出して、宗教が人心を完全に掌握することは不可能になっていた。

時代は、ただ神の教えを盲目的に信じる宗教から、「我々にとっての善が全ての人々にとっても善である」<sup>9)</sup> という、何人もお互いに理性で納得できる道徳に重きを置いて物

事を判断しよう、とする方向に向かっていた。そこで、多くの英国国教会の牧師達の間で論じられたのが、「宗教と道徳」は分ち難い問題である、ということである<sup>10)</sup>。牧師一家に育ったオースティンの中では、クリスチャン的道義心となってこれらが一体化していたことは信じるに難くない。また、「道徳が個人間の関係において正誤を識別する内面の原理であるなら、マナーはその関係が外面に現れる振る舞いを支配する行動規範である。」(同)ということになって、「道徳とマナー」の有無は、人間の心と言動、内と外、を判断する基準となる。

ルーシーとの婚約の履行は、聖職を天職と心得るエドワードにとってこの道徳という点においては、自分の幸福を犠牲にしても一步も譲れないものであり、それを認めて善しとするエリナはまた、それゆえにエドワードを愛するのである。

やがてルーシーが、エドワードに代わって家督を譲り受けた弟のロバートに乗り換えて結婚したとわかった時、エリナの心の奥に押し込めた愛情が、一点の曇りもない喜びとなってほとぼしる。それまで常に冷静な振る舞いを見せていたエリナが「部屋から走り出て... 喜びのあまり泣き出した。」(p.360)のである。「統べ治める」必要のなくなった愛情の輝きは、彼女の苦悶を支え続けた宗教的信念あってこそのものであった。

### Ⅲ. 家庭経済

エリナとメアリアン姉妹のみならず、Sense and Sensibilityの登場人物ほぼすべての結婚問題はまた、金銭問題でもある。

オースティンの時代、またその作品中で、所有する土地財産の価値の約5%、少なくとも4%強が年収と計算されている。例えば、『高慢(自負)と偏見』(Pride and Prejudice, 1813)に登場するビングリー(Charles Bingley)が亡き父から10万ポンド譲り受けた(同書p.15)となると、周りは、では年収は4~5000ポンドくらい(同書p.4)とはじき出す。また、上流から中流の女性が結婚に際して婚家に持参するお金または所有財産は、実質的に夫の資産となり、その管理の下に運用される<sup>11)</sup>。つまり、夫の年収に加算して計算され、それが一家の年収となるのである。

エリナら3姉妹の持参金は父の先代から贈与されている各1,000ポンドで、それに比して異母兄ジョンの財産は莫大である。彼は亡き母の莫大な遺産の半分をまず相続し、父の死後年収4,000ポンドのノーランドの領地と母の残りの遺産をもらうことになっていて、妻ファニーの持参金10,000ポンドも持っている。彼らの父は領地を除けば自由になるお金は7,000ポンドしかなく、後妻である母親は夫からの遺産以外は財産がない。心配した父親は死期が迫ったときに彼を呼んで姉妹への援助を頼むが、妻ファニーの巧みな誘導によってそれを反故にしてしまう。姉妹と母は父亡き後、合計10,000ポンド(年収500ポンド)で生活していくことになったのである。

エリナが最初にエドワードとの交際で躓いたのは、彼女の持参金1,000ポンド(年収50ポンド)では将来彼が受け継ぐべき財産に比して少なすぎる、と彼の親族が判断したためだった。彼は成年であったがその時自由に使えるお金は2,000ポンド(年収100ポンド)、まだ父の遺産を相続しておらず、母親が相続

人を決める権利を持っていた。

ルーシーとエドワードの婚約を聞いた彼の母親は、それを解消して自分が薦める持参金30,000ポンド（年収1,500ポンド）のモートン嬢と結婚するなら、年収1,000ポンド分の財産を贈与すると言い、彼が断ると年収1,200ポンドに吊り上げて解消を迫る。それでも彼が応じないので、彼を相続人から外して弟を相続人にする手続きをしてしまう。

その時ブランドン大佐が提供してくれたデラフォードの聖職禄は年収約200ポンド、これを聞いたルーシーは、エドワードの所持金と合わせて年収300ポンドで家計を切り回していくために、教区民が教会に納める「十分の一税を限度まで引き上げ、デラフォードでは彼（ブランドン大佐）の召使、馬車、牛、家禽をできるだけ利用してやろうとひそかに決心」（p.293）する。そうやってルーシーはジェニングス夫人が認めるとおり、「年500ポンドもあれば、他の女なら800ポンドでやっていくぐらいの体裁はつくる」（p.260）女なのである。

ルーシーがロバートに乗り換えた後、エリナとエドワードが婚約した時の所持財産見込みは聖職禄からの収入を合わせて年収350ポンド、これでは結婚するのに不十分と判断したエリナはエドワードに母親との和解を勧める。フェラーズ夫人は相続人にしてやったロバートに裏切られたばかりで、彼の嫁ルーシーよりは家柄も財産もあるエリナとエドワードとの結婚を反対する可能性は減ったと判断したためである。夫人はまだモートン嬢を諦められなかったが、これ以上息子に背かれることを恐れてエドワードに10,000ポンド（年収500ポンド）贈与し、結婚を承諾する。年

収850ポンドを得た二人は晴れて結婚する。

一方、メアリアンがウィロビーに捨てられたのも、彼が年収6～700ポンドにも拘らずそれ以上の浪費をし、その穴埋めをアレナム・ハウスの相続で補おうと思っていたところ为例の不行跡が発覚して相続から外されそうになり、ジェニングス夫人が主張するような「馬を売り、家を貸し、召使たちに暇を出して、すぐさま徹底的な改善をする」（p.194）策を採らず、あわてて持参金50,000ポンド（年収2,500ポンド）の女性と結婚したからである。

やがてメアリアンはブランドン大佐の愛情に触れ、2年後に彼と結婚する。彼女が落ち着いたデラフォードは、年額2,000ポンドの収入がある領地で、ジェニングス夫人は、「教会に近くて、有料道路から4分の1マイルしか離れていないの...村の肉屋はすぐ近くで、牧師館は石を投げれば届く距離」だから、「 Barton 荘園よりずっといいわ、あそこは肉を買いに3マイルも使いをやらなきゃならないし、近くにあなた達のお母さん(Barton 荘)以外にご近所はないし。」(p.197) と言うが、つまりそれは Barton 荘園の持ち主サー・ジョンの方がずっと広大な領地を所有し、年収も多いということを示している。

こうして見ていくと、当時彼らの属する紳士階級では、その生活を維持するのに少なくとも年収500ポンドというラインが見えてくる<sup>12)</sup>。ダッシュウッド未亡人はそれで家族4人に女中2人と下男1人を抱え、ジェニングス夫人はその金額でエドワードとルーシーなら女中と下男を2人ずつ、と見積もる。現代の自家用車に相当する馬車は、近くに用立てしてくれる親戚などがいれば、持たないに越したことはない。馬、厩舎、馬の世話をする

下男などの維持費がかかるからである。

この*Sense and Sensibility*は、オースティンの作品の中で一番正面切って金銭問題を扱ったものである<sup>13)</sup>。中でも特に、牧師のきわどい階級事情が金銭問題を通じて事細かに描かれている。ブランドン大佐は年収200ポンドの聖職禄では「独身者なら不自由ないが」(p.384)、エドワードとルーシーは結婚にまでは踏み切れないのではないかと懸念し、一方エリナは二人が結婚できると予想する。金銭面のやりくりにかけてはジェニングス夫人とルーシー観を同じくしているからである。聖職禄を持つ牧師は、年収500ポンドのラインをめぐって、それより200ポンド少なければルーシーが考えたように(前述)、対面を保つためには容赦ない教区民への搾取と領主への寄生が必要だし、エリナとエドワード夫婦のように350ポンド多ければ「申し分なく、望んだ以上」(p.374)と考えてもよい。

因みに、エドワードが聖職禄を受けられなかった場合は、ジェニングス夫人が危ぶんだように「彼の2,000ポンドの利子(年収100ポンド)と年収50ポンドの副牧師(curacy)に落ち着いて... 女中2人と下男2人どころじゃないわ!... なんでもこなせる頑丈な女中を1人雇わなくっちゃ。」(pp.276-277)ということになる。紳士階級からの転落である。

また、エドワードが土地を見る目も、土地からの収益の十分の一を受け取る聖職禄を持つ牧師、言い換えれば紳士(地主)階級の目である。メアリアンにバートン周囲の景観の賛美を促されて答える場面は、よくメアリアンのロマンチックなピクチャレスク趣味を揶揄したものとされるが、それだけではない。

彼は、「とてもいい土地(a very fine country)と言える... 丘陵は勾配が急で、森はいい材木がいっぱい採れそうだし、谷間は見た目にも心地よく暖かそうだ... 豊かな牧草地とそこに散らばる数件のこざれいな農家がある」と褒め、なぜなら「美しさと実用性が結びついているから」だと言う(pp.97-98)。林業、牧畜、農業が豊かに営まれる土地としてその美しさを認めているのである。そして、エリナとの結婚が決まった後でのデラフォードの教区の話は、「牧師館、庭園、教会所属地、教区の範囲、土地の現状、そして十分の一税の見積」(p.368)である。

*Sense and Sensibility*に限らず、オースティンの小説に登場する聖職禄を持つ牧師はいずれも教区に対してそういう目を持っている。自分の結婚相手、または結婚してくれなかった相手に自分の教区や牧師館、つまり収入を示す土地と暮らしぶりを見せる。また女性や親族はそれらを見聞きして相手の収入を推し量る。現代で言えば、給与明細を見せる、或いは見るようなものである。オースティンの完成作品は全部で6作、制作が中断された10年ばかりを挟んで3作ずつ前期と後期に分かれるが、特に初期の作品にその描写が多く現れる傾向がある。

最初の完成作『ノーサンガー僧院』(*Northanger Abbey*, 1803脱稿、出版は没後1818)ではほぼ1章を割いて、ティルニー将軍(General Tilney)が息子の花嫁候補にと目論むキャサリン・モーランド(Catherine Morland)を息子ヘンリーの教区ウッドストン(Woodston)に連れて行き、教区の村、牧師館と庭園、馬小屋と牧場を見せる様子が事細かく描写されている(同書pp.209-214)。

*Pride and Prejudice* (1797初稿) では、エリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) に結婚を断られ、彼女の親友シャーロット・ルーカス (Charlotte Lucas) と結婚したコリンズ牧師 (Rev. Collins) は、遊びに来たエリザベスに彼女が失ったものを誇示するかのよう、牧師館と庭園そして聖職禄を与えてくれたキャサリン令夫人の広大な土地と庇護の様を見せ (同書 pp.155-157)、訪問を終えたエリザベスに「あなたの友は貧乏くじを引いたようには見えないでしょう」 (同書 p.216) と誇る。

後期の作品でも『マンスフィールド荘園』 (*Mansfield Park*, 1814) では、准男爵家の次男エドモンド (Edmund Bertram) が継ぐべきソーントン・レイシー (Thornton Lacey) の牧師館の様子を狩りの途中で見たヘンリ・クローフォード (Henry Crawford) が、そこを紳士の館 (gentleman's residence) らしく改造する方法を述べている間、エドモンドに関心を持っているヘンリの妹メアリ (持参金20,000ポンド) が聞き耳を立てる様が描かれている (同書pp.241-244)。

*Sense and Sensibility*は、最初1795年～6年に *Elinor and Marianne* という題で書かれ、1797年には現在の題で完成、さらに手を入れて1811年に出版されている。出版前の約10年間、それは制作が中断された時期ともほぼ重なるのだが、牧師の家族である作者の身には生活経済上の一大変化が起こった。1801年に2つの聖職禄を有していた父親が家督を長兄ジェームズ (James Austen) に譲って保養地パースで引退生活を送ると決意、1805年逝去、それから作者と母親と姉は裕福な親戚の養子となっていた兄エドワー

ド (Edward Knight) が1809年に領地チョートン (Chawton) に持ち家のひとつチョートン荘 (Chawton Cottage) を提供してくれるまで、生活が安定しない日々が続いたのである。父の逝去後、母娘には自分達の資産は4,000ポンドあまり (年収210ポンド) しか残らなかったが、最終的には作者の兄弟達からの送金年250ポンドを得て、計年収460ポンドで暮らした<sup>14)</sup>。オースティンが、聖職禄の委譲、生活費の減少、転居などの環境の変化を最も受けた時期に、自己の経験をつぶさに観察した結果が初期の作品に多く採り入れられ、特に最初に出版されたこの *Sense and Sensibility* に色濃く出たのだとしても、不思議ではない。

人間の生と死と結婚には必ず金銭問題が付きまとう。そのことをこの美しい姉妹の結婚物語は非常に具体的に数字を挙げて示してくれるのである。

## 結論 結婚という契約

エリナとメアリアンの父ダッシュウッド氏は、残される家族を愛するがゆえに今わの際まで彼女らの財産のことを心配し続けた。愛する者たちの今後の生活の保障をしてやるのが、何よりの愛の証だったのである。

昔から結婚には愛だけではない要素が含まれている。紳士階級の結婚は階級を維持するための金銭契約でもあり、ダッシュウッド氏が最期まで心配したように結婚生活を保障する財産＝持参金が不可欠であった。その保障を託された息子のジョンは、年収500ポンドあればダッシュウッド未亡人一家は十分暮ら

していけるという妻ファニーの論を根拠に、父の遺言を反故にした。彼にとって妹の結婚は、結婚生活を保障する持参金を持たせずにおきながら、自分に代わって妹達の階級と生活を保障してくれる誰かが見つかることであった。姉妹の置かれた状況は、現在の暮らしには困らないにせよ、将来の結婚という見込みでは厳しいものだったのである。

結婚はまた生き方の選択でもある。各人の価値観、宗教的倫理観が絡み、結婚の在りようが複雑になっていく。メアリアンは感情におぼれ、自制を知らない。「愛情が強ければ自制など不可能だし、穏やかな愛情なら自制する価値がない」(p.104)と考える。その生き方を選んだ結果、失恋の悲しみを事ある毎に蒸し返しては増幅させ、遂には自分の健康さえ省みなくなって無謀な散歩を繰り返した挙句重病に陥る。九死に一生を得た彼女は、「自分の感情が自分の苦しみをお膳立てした... もし死んでいたら自己破壊行為 (self-destruction) だった」、だから「神様と姉さんたちみんなに償う (atonement to my God, and to you all) 時間がほしい」と強烈に願う (pp.345-346)。自己破壊行為とは、自殺を婉曲に述べたものである。自殺はキリスト教徒が絶対に行ってはならない破戒行為である。結婚を自分個人だけの愛情の問題であると考えていたメアリアンが、神と自分を取り巻く人々(社会)の問題でもあったことに気づいたことを示す重い言葉である。

前稿<sup>15)</sup>でも触れたが、キリスト教社会における結婚とは、もとは個人と個人の間の契約ではない。男性と女性が祭壇に立って、牧師を介し、夫となり妻となること (man and wife) を神に誓う、神と人間との間の契約な

のである。カトリックが原則として離婚を認めないのも、結婚は神との契約であるという視点を抜きには語れない。英国国教会は新教には属し当時でも離婚は認めたが、それは一方の明らかな不貞による他方からの申し立てによるものであった。ルーシーはこれを逆手に取り、エドワードの「心が他の女のものとなっていた」(p.365)と述べて彼の心の不貞のせいにして婚約の解除を申し立てる根拠にし、自分がロバートと結婚することを正当化したのである。

近代に入って科学と産業の世となり、宗教の絶対性が薄れても、依然として人々の心の奥底には宗教的倫理観があり、結婚を個人と個人の感情だけの問題、または金銭的契約と完全に割り切ることはできないのである。人は、人とのつながりの中で生きている。そして結婚と愛は、魂の問題なしには語れない。エリナとエドワードが見せる宗教的ストイシズムは現代人のわれわれには理不尽を通り越して不可解と映るかもしれないし、その時代に生きたオースティンでさえその状況の皮肉を描かずにはおけなかったほどではあるが、それでもこの小説のハイライトはと問われれば、エリナがエドワードに聖職禄への推薦を伝えて二人が共に別れを受けとめる場面、そしてエドワードがルーシーとの婚約から解き放たれたことをエリナが知った場面を上げることになる。当時の牧師階級の結婚における金銭問題が色濃く影を落としたこの小説の中で、心を神に向かって開き、人間が神との契約を歯を食いしばって守り、その結果、神の祝福を正面から受け止めた場面はひときわ輝きを放つ。結婚を〈神との契約〉という宗教的倫理観で捉える点で、オースティンはまぎ

れもなく、「キリスト教徒作家」であった。

脚注

- 1) Austen, Jane. *The Oxford Illustrated Jane Austen*. (6 vols.) Ed. R. W. Chapman. Oxford: Oxford University Press, 1986.  
本論で使用したテキストは、以下のとおりである。  
*vol. I. Sense and Sensibility (1811)* ,  
*vol. II. Pride and Prejudice (1813)* ,  
*vol. III. Mansfield Park (1814)* ,  
*vol. V. Northanger Abbey (1818) and Persuasion (1818)*  
オースティンの作品への言及はすべてこのOxford版に拠る。本文中の引用は、*Sense and Sensibility*は頁数のみ、その他の作品は書名と頁数を( )に入れて示す。  
尚、引用文中の下線と、全ての文献の引用文の翻訳は筆者による。
- 2) McMaster, Juliet.& Strovel, Bruce. *Jane Austen's Business*. London: Macmillan Press, 1996. p.158.
- 3) トマリ、クレア『ジェイン・オースティン伝』矢倉尚子訳 東京：白水社、1997年。pp.216-217.
- 4) McMaster & Strovel, *Jane Austen's Business*. pp.158-159.
- 5) 英国国教会 (the Established Church) では、領主が自分の所領地の教区の聖職推薦権 (presentation) を持ち、それによって聖職禄 (living, benefice) を得た牧師 (rector) が教会の維持・生活費として十分の一税 (tithe) を領収した。
- 6) Collins, Irene. *Jane Austen and The Clergy*. London: Hambledon Press, 1994. pp. 6-7.
- 7) McMaster, Juliet.& Strovel, Bruce. *Jane Austen's Business*. p.202.
- 8) Collins, *Jane Austen and The Clergy*. p.191.
- 9) 神山妙子「生の真髄を尋ねて」『イギリス近代小説の誕生』都留信夫編著 MINERVA英米文学ライブラリー① 京都：ミネルヴァ書房、1995年。pp.166-167.
- 10) Collins, *Jane Austen and The Clergy*. p.143.
- 11) Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Touchstone, 1993. p.181.
- 12) Copeland, Edward. *Women Writing about Money*. Cambridge: Cambridge University

Press, 1995. pp.30-31.

- 13) 久守和子「戯画化された感性崇拜」『イギリス近代小説の誕生』都留信夫編著 MINERVA英米文学ライブラリー① 京都：ミネルヴァ書房、1995年。P.84.参照
- 14) Le Faye, Deirdre. *Jane Austen A Family Record. 2<sup>nd</sup>. Ed.* Cambridge: Cambridge University Press, 2004. pp.146-147.  
Copeland, *Women Writing about Money*. p.222.
- 15) 伏見親子「ジェイン・オースティンが読まれる理由—〈部屋〉は時空を超える魔法の絨毯：Pride and Prejudiceを中心に—」、愛国学園大学人間文化研究紀要 第9号、2007年。p.18.

参考文献

- 1) Duckworth, Alistair M. *The Improvement of the Estate*. Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1994.
- 2) Hill, Constance. *Jane Austen— Her Homes and Her Friends*. London: Routledge / Thoemmes Press, 1995.
- 3) Kieckhafer, Margaret. *Jane Austen, Feminism and Fiction*. London: The Athlone Press, 1997.
- 4) Lane, Maggie. *Jane Austen's England*. London: Hale, 1996.
- 5) MacDonagh, Oliver. *Jane Austen, Real and Imagined Worlds*. New Haven & London: Yale University Press, 1991.
- 6) 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』東京：成美堂、1995年。
- 7) 藤田清次『評伝ジェイン・オースティン』東京：北星堂書店、1981年。

## Marriage as a Contract: Principles, Religion and Finances in *Sense and Sensibility*

Shinko FUSHIMI

### Abstract

Jane Austen describes various phases of marriage, especially in the area of principles, religion and finances in *Sense and Sensibility*. From the very beginning of the novel, Austen acquaints us with the financial problems concerning death and marriage of the country gentry in the early 19th century.

The protagonists of the novel are two beautiful sisters, Elinor and Marianne, representing sense and sensibility respectively, which implies that the English culture was in a transition period moving from classicism to romanticism.

Elinor was in love with Edward, but he had been secretly engaged with Lucy long before he met Elinor. He, too, became aware of his love for Elinor, but he didn't allow himself to break his promise of marriage in keeping with his religious faith, for he wanted to become a rector. Elinor admired him all the more for his faithful conduct. Marianne fell in love with Willoughby, who soon became short of money and married another rich woman. Unfortunately, both Elinor and Marianne had been left with little dowry after their father passed away.

Marianne became critically ill as a result of her excessive romantic grief and careless behavior, which she later referred to as 'self-destruction,' in other words, suicide. After recovering, she realized that marriage was not only a matter of individual love and feelings but also a social concern and problem of faith. Thus marriage is a contract between God and Man. On that point, Austen was a genuine Christian writer.